久留米大学文学部紀要
国際文化学科編第28号（2011）

韓国における近世都城史研究の動向
―都城空間をめぐる諸問題―

桑　野　栄　治

The Trends of Early Modern Urban Studies in Korea：Various Problems of Urban Planning

Eiji Kuwano

【目次】

はじめに
1，中国と朝鮮の都城
2，北京と漢城
3，朝鮮太宗代における都城整備
4，礼制からみた漢城の建設原理
5，朝鮮世宗代の都城修築
6，漢城と開京―今後の課題

はじめに

これまで，韓国の歴史学界におけるソウル研究はおもにソウル特別市史編纂委員会発行の『鄕土ソウル』（1957年創刊．年２回発行）が中心的役割を果たしてきたが，1394年の漢城（いまのソウル）遷都から600周年にあたる1994年以降，ソウル研究はさらに活発となった．たとえば，1994年にはソウル市立大学校附設ソウル学研究所が機関誌『ソウル学研究』を創刊した（季刊）ほか，ソウル特別市史編纂委員会編『ソウル六百年史』全10巻（時代史篇６巻，文化史蹟篇・民俗篇・人物篇・年表各１巻）が完結した（1977～2006年）．2002年にはソウル市鐘路区にソウル歴史博物館が開館し，翌年より研究論文集として『都市歴史文化』（創刊号のみ誌名は『研究論文集』）を刊行している．

ところが，朝鮮王朝（1392～1987年）の漢城研究に関していえば時期的に朝鮮初期（ほぼ15世紀に相当）の遷都期と商業が発達した17・18世紀以後の朝鮮後期に偏重している，という研究成果の時期的不均衡は否めず，また論争が展開されるほど論点に差違のある研究はさほど多くない，とやや悲観的な見方もある〔張志連2002，p.70，p.87〕．朝鮮時代の史料は膨大であるが，一次史料を十分に検討した論攷はかならずしも多くはないとの指摘もある〔禹成勲2005b，p.124〕．高麗王朝（918～1392年）の王都開京に関する研究も1990年代に入ってようやく本格化し，南京（いまのソウル）研究にいたっては史料の絶対的不足からそれ以上に不振である．研究主題も文宗代（1046～83年）の南京設置，粛宗代（1095～1105年）の南京遷都論議，高麗末期の恭愍王（1351～74年）・禑王（1374～88年）・恭讓王代（1389～92年）の漢陽遷都論議の３点に集中しており，ソウルにおける考古学

的発掘も困難であるため，宮闕を中心とした都市構造の輪郭もいまだ描けていないとの現況報告がある〔李益柱2005，pp.66-67，pp.86-87〕.

その考古学分野では2000年以降，ソウルの宅地開発と都心再開発事業の進行にともなって発掘調査が行われ，清渓川の広通橋や東大門南側の五間水門址の確認（2003～04年），鐘路区清進洞にあった市廛（物品流通施設）の遺構調査（2004年），ソウル西北部の恩平区津寛内・外洞で発見された5,000基に達する朝鮮時代の集団墓域（2006～08年），朝鮮初期の代表的王室寺刹であった圓覚寺（1464年創建）址の試掘調査（2002年）など，多くの成果を得てはいる．しかし，体系的な学術調査というよりは開発にともなう救済調査であって，額程度の試掘調査が大部分を占めることから，ソウルの歴史と文化を把握するには限界があると指摘されている〔朴サンビン2008〕．最近では2008年９月から2009年６月にかけて「光化門広場」（幅約34m，長さ約557m）造成事業の一環としてソウルの朱雀門街に相当する世宗路（幅約100m，長さ約600m）の一部が発掘調査され，植民地時代の路面電車の線路と枕木のほか，５m下からは朝鮮初期の土層，つまり漢城の「六曹通り」（当時は約50m）が確認された〔朴チュンボム2010〕．しかし，その両側にあった肝心の官庁街は現在，東側に文化体育観光部・駐韓アメリカ大使館・韓国通信・教保生命ビル，西側には政府中央庁舎・世宗文化会館・現代ビルなどが立ち並んでおり，朝鮮時代の中央官庁の遺構それ自体の発掘調査はきわめて困難といわざるをえない.

１，中国と朝鮮の都城

1990年代後半以降，韓国では前近代東アジア世界における比較史的観点に立った漢城研究もあらわれるようになった．たとえば，李愚鍾氏の論攷「中国とわが国の都城の計画原理および空間構造の比較に関する研究」（1995）をあげることができよう[1]．李愚鍾氏は中国歴代の城市建設と三国時代以降の朝鮮半島における都城計画を俯瞰したうえで，以下のような結論を導き出している.

１）都城の機能配置は中国と同様，朝鮮でもほぼ『周礼』冬官考工記にしたがった．ただ，都城の中心機能である宮城の位置は風水地理思想と防御目的から，北側の鎮山を重要視して北側に片寄る形態が多い.

２）都城の平面形態は，高麗時代以前までは中国の影響をつよく受けて方形を維持していた（たとえば高句麗の長安城，渤海の上京龍泉府，新羅の王京）．しかし，高麗時代以後，地理的与件により円形または不規則な平面形態となり，自然の地形地勢に順応しようとした.

３）都城の立地は朝鮮の場合，山岳地形を利用して都城を築造したため堀はなく，都城の規模も立地与件により大陸の中国に較べると手狭である.

４）街路網パターンは，中国が十字型の幹線道路を基本に格子型のパターンを遵守するが，朝鮮ではＴ字型の形態をみせる．風水地理では十字型の交差路は不吉なものとみるためであろう．また，都城の城門も不規則な平面形態により８つの城門を置

1　禹成勲氏はかつて，李愚鍾論攷を「概説書や通史的研究によって概括的に言及されていた中国の都市計画制度との関係について本格的に考察した」と評価した〔禹成勲2005b，p.120〕.

くことが多い．

5）都城計画は，中心軸とそれにともなう対称配置を強調する中国に対し，自然に順応しようとする朝鮮では都市の象徴性の側面が弱い．

6）中国都城の同形反復的形態は古代朝鮮に影響を与え，機能配置・平面形態・立地・街路網計画・土地利用パターンなどで類似性をみせるが，相違点もある．中国の都城制を基礎に漢城府の計画者（権仲和，鄭道伝，朴子青ら）は独自の計画規範を発揮したであろう．

とくに李愚鍾氏は事例分析として，朝鮮時代の漢城と明清時代の北京を比較している．北京の都城計画の特徴は都市の中心軸を強調し，皇城を中心軸線上に位置させたところにある．つまり，都城の中心に皇城を置き，皇城の前の左側（東）に太廟を，右側（西）には社稷壇を築き，皇城の北門外に市場（内市）を開設して「左祖右社，面朝後市」の伝統的な計画原理と一致する．一方，漢城では丘陵地に立地したため，宗廟と社稷の対称配置以外には整然とした対照的配置は不可能であった．漢城では主山である北岳山麓を背にする背山臨水という風水思想の原則にしたがったため，宮闕は都城内の中央に位置することはできず西北に片寄る立地となり，市廛（市場）は朝廷の東南に一列に配置された[2]．幹線道路も『周礼』にいう南北各３本の「国中九経九緯」の形態ではなく，城門も東西南北に各３門ずつの12門ではなく４大門と４小門の計８門であって，これも「旁三門」の原理にはしたがっていない．そもそも半島の韓国と大陸の中国では地理与件に差違があり，都城の規模では北京が約62.4平方キロメートルの面積に対して，漢城は約16.1平方キロメートルである．また，北京は内城と外城に区分されるが，漢城に内城はなく，山城（南漢山城と北漢山城）が外城の役割を果たした．漢城に人工的な堀を備えていないのは河や険峻な自然地形を利用したためである．それでも都城の中心をなす宮闕と官衙は都市構成要素の共通点であろう，と李愚鍾氏はいう．

李愚鍾氏によるこうした理解は近世東アジアにおける北京と漢城の都城のあり方を比較するうえで示唆に富むものであり，今後の指針のひとつとすべきであろう．日本でも，たとえば妹尾達彦氏が中国の都城の変遷を包括的に捉えたうえで，10世紀以降の高麗・朝鮮の都城にも触れ，「方格状の街割を利用しない自由な街並みの形成が進み出し」，「自然環境や伝統に根ざす都城が，独自に成長を始めた」と展望する〔妹尾2006，pp.213-215〕．

もちろん，問題がないわけではない．李愚鍾氏は平面形態から北京と漢城の空間構造に迫ったが，このふたつの都城が成立してゆく時間軸が捨象されており，同時代史料の活用もない．たとえば，李愚鍾氏が漢城の外城とみなす南漢山城は，朝鮮後期の仁祖２年（1624）に平安北道で発生した反乱（李适の乱）が一時漢城に迫ったことを契機に築城されたものであり，北漢山城の戦略的重要性が認識されるようになるのも壬辰倭乱（文禄・慶長の役）勃発後の宣祖29年（1596）のことであった〔ソウル特別市史編纂委員会1963，pp.570-572，pp.620-623〕．それゆえ，朝鮮前期にこのふたつの山城が漢城の外城として機能していたとは考えがたい．また４）の街路網に関しては，たしかに漢城の場合はＴ

2　高宗２年（1864）以降に成立した『東国輿地備攷』（ソウル特別市史編纂委員会，ソウル，2000年８月影印第２版）巻２，漢城府，場市条に「世傳神武門外北，古有場市，即周禮後市之義云，而今不可考」とあるが，漢城に「後市」が存在した可能性は低い〔ソウル特別市史編纂委員会1999，pp.174-175〕．

型の形態をみせてはいるが，同じく風水地理の影響をうけた高麗開京の都城の中心部には，皇城（内城）の実質的な正門にあたる広化門（東門）から羅城（外城）の南門である会賓門にいたる道路と，羅城東西門の崇仁門と宣義門をつなぐ道路が十字型に交差する「十字街」が存在した[3]．それゆえ，高麗・朝鮮の街路網はかならずしも風水地理のみでは説明できない側面もあろう．最近では，南大門に入った人が景福宮に視線を向けることができないようにした計画的な道路構造であった，という都市景観論からの指摘もある〔李ギボン2008，p.104〕．

2，北京と漢城

その点では最近になって公表された李相椓氏の論攷「朝鮮の宮闕と出会う―宮闕の前と後」（2008）をあげることができよう．漢城が朝鮮の都として造成された時期は，明では南京（1368～1420年）が都であった．明が元の大都を北京としたのは1403年（永楽元）であって，1408年に宮闕工事を始め，元代の城壁を南側に拡張する工事は1419年，そして北京への遷都が1421年である．この年は朝鮮では世宗２年にあたる．漢城の建設は太宗（在位1400～18年）・世宗（在位1418～50年）年間に本格的に進行した．つまり，明の都城である北京と朝鮮の都城である漢城がほぼ同時期に建設されたところに，李相椓氏は注目したのである．参考までに漢城建設の略年表を掲げよう．

【漢城建設の略年表】

太祖３年（1394）８月　漢陽を新首都に決定し，都市計画に着手
　　９月　鄭道伝ら政府高官が宗廟・社稷のほか宮闕・朝市・道路の地を選定
　　10月　開城から漢陽に遷都
　　11月　李成桂，宗廟と社稷の地を視察
　　12月　新首都造成工事の起工式を実施
太祖４年６月　漢陽府を漢城府と改称
　　９月　宗廟と光化門前の官庁街が落成
　　10月　新闕が完成し景福宮と命名
太祖５年１月　城壁と城門の建設工事に着手
　　４月　漢城府の行政区域を五部に分け，52坊制を実施
　　９月　城壁の築造をほぼ完了
太祖６年４月　東大門が完成
太祖７年２月　南大門が完成
定宗元年（1399）３月～太宗５年（1405）10月　この間，開城へ還都
太宗５年（1405）10月　離宮の昌徳宮が落成

3　〔北村1990，pp.35-36，pp.38-41〕．なお，開城研究の専著を公表した朴龍雲氏は十字街にいたる南北線の起点を羅城の北門である北城門とした〔朴龍雲1996，p.36〕が，韓国でも最近では皇城の広化門とみなしている〔鄭杅根2002，pp.143-144〕〔徐聖鎬2002，p.174〕〔金昌賢2002，p.170〕．1009～29年に築造されたとされる高麗の羅城（全長約23km）とその城門に関しては，さしあたり〔細野1998〕，参照．

太宗11年閏12月～12年２月　開川（人工下水道）工事を実施
太宗12年２月～14年９月　鍾路を中心に市廛の行廊を整備
世宗４年１月～２月　城壁の修築工事
＊〔吉田1992，p.96〕を一部修正，加筆

具体的な事例として李相球氏は漢城の行廊の完成時期をあげる．漢城の行廊は高麗の都城開京の長廊[4]を継承したものである．『朝鮮王朝実録』によれば，1413年（太宗13）5月に景福宮と昌徳宮の前の「長行廊」造成が完了し，完成した左右の行廊は総全長1,360間（約2.5㎞）であった[5]．北京で城壁を南側に拡張したのが1419年であったから，行廊の建設により漢城が都城空間の枠組み形成を完了したのは時期的にやや先立つことになるのである．さらに北京と漢城の同時代性に関連していえば，明では1544年（嘉靖23，中宗39）に既存の城郭の南側に南城を築いて外城とし，現在のように内城の南側に外城を継ぎ足した構造となった．明清以後，元の大都を継承した内城が整然としているのに対して，明代に造成されたこの外城地域は格子型ではない．漢城が格子型街路体系とは無関係であったように，明の北京も厳格な格子体系を採っていなかったことは当時の東アジアにおける時代性を反映した結果であった，と李相球氏は推測する．

また中国では隋唐長安城以後，宮城が都城の中央に位置するようになると宮城と外城とのあいだも狭まって中軸線の様相にも変化がみられるが，漢城では景福宮と昌徳宮の前に行廊を備えた中心街路軸を朝鮮都城制の変化のひとつとみなす．もっとも，朝鮮太宗代における行廊の建設事業に関しては〔杉山1984，pp.111-116〕に詳しいが，古代中国が南北の中軸線を重視したのに対し，近世朝鮮の漢城では東西の中心街路軸を重視するようになったとみなすのは示唆に富む指摘といえよう．

３，朝鮮太宗代における都城整備

その太宗代における都城整備に関する最近の論攷に張志連「太宗代後半の首都整備と意味」（2007）がある．かつて張志連氏は太宗代の建設事業を太祖代（1392～98年）の都城建設の補完事業と理解していた〔張志連2000，p.91〕が，これをあらためて太宗10年以降に都城整備事業が集中的に展開された意図と表象を分析した．父王太祖の死後（太宗８年），太宗は本格的に漢城を整備した．とりわけ張志連氏が「太宗代最大の工事」として注目したのは，河川の浚渫と行廊の建設である．

惜しむらくは，すでに杉山信三氏が「太宗の造営関係にみる主な業績は所謂開川之事と

4　『高麗史』巻21，世家21，熙宗４年（1208）７月丁未条．『宣和奉使高麗図経』巻３，城邑，国城・坊市条．開京の長廊に関しては〔杉山1984，pp.111-112〕のほか，北村秀人氏が常設の京市（王京の市）の施設として注目のうえ考察を加えた〔北村1990，pp.35-36，pp.38-42〕．開京には住居施設とは関係のない細長い廊形式の専用商業施設があり，地面の上に商品を陳列して販売する商業取引も行われていた〔禹成勲2005a〕．むろん，長廊という建築様式は宮殿・官庁・寺院・住宅に関する記録にもみえる〔禹成勲2005c，pp.236-237〕．

5　「長行廊畢成，自鍾楼西北至景福宮，東北至昌徳宮及宗廟前楼門，南至崇禮門前後，所成左右廊，共一千三百六十間，（後略）」（『太宗実録』巻25，13年５月甲午〔16日〕条）．〔杉山1984，pp.113-114〕．

行廊建設である」と喝破し，行廊建設が３次にわたって進行したことも指摘していた〔杉山1984，p.108〕にもかかわらず，先の李相球氏と同様，杉山氏による先行研究は看過されている[6]．当該期の行廊建設に関する実録記録はほぼ提示済みではあったが，張志連氏の独創的な点は空間的表象を指摘したところであろう．第１次行廊建設の完了については太宗12年５月の実録記事に，「都城左右行廊成る．闕門より貞善坊洞口に至り，行廊四百七十二間，進善門の南に楼門五間を建て，名づけて敦化と曰う．議政府，昌徳宮門外の行廊を各司に分給して朝房と為さんことを請う」とある[7]．本来，太祖代には景福宮の前に官庁街が造成されていたが，このとき昌徳宮の正門である敦化門の前を朝房としたのはあらたな官庁街の造成であり，王権の空間的表象であったと張志連氏はみなす．ただ，張志連氏は各官衙のための朝房がその後，具体的にいかに利用されたのかについては説明がなく，官僚が朝会儀礼の時間を待つ朝房[8]をただちに官庁街とみなしうるのかはやや疑問であるが，これより１年前に太宗は昌徳宮の進善門外に議政府朝房の造営を命じていたこと[9]，また太宗が景福宮とは別途に昌徳宮を建設して在位期間の大半をここで過ごしたことを考えると，儀礼執行の便宜上，昌徳宮の前の行廊を朝房に割りあてるのは合理的な措置であり，かつ政治的意図があったであろう．張志連氏はさらに，敦化門楼には君臣が朝会する時期を厳格にすべく鐘がかけられ，宗廟と闕門の前には下馬碑を設けるなど，昌徳宮一帯が太宗の王権を頂点とする礼制を効果的に表象するようになったと指摘する．

太宗は景福宮を明使迎接の場，もしくは聖節の儀礼の場として利用すると意思表示して差別化をはかったという[10]が，実際にこうした対明外交儀礼が景福宮で執り行われたのか否かについては検証すべきであろう．このうち，太宗10年代の明使迎接儀礼に関しては，以下の３件を提示することができる．

a 朝廷使臣宦官太監黄儼來，上以時服率百官，出迎于慕華樓，備綵棚・雑戯，迎入景福宮行禮，儼出禮部咨，咨曰，（中略）儼又宣帝旨曰，（後略）（『太宗実録』巻22，11年８月甲辰〔15日〕条）

b 太監黄儼・少監海壽等奉勅書至，設山棚・結彩，上備儀仗，出迎于慕華樓，至昌徳宮宣勅，（後略）（同書巻34，17年７月丙寅〔13日〕条）

6　朝鮮総督府技手の経歴を持つ杉山信三氏の成果に対し，韓国の学界ではたとえば李康根氏が「論点で植民史観に依然として固執しており，注意する必要があるにもかかわらず，最近まで後続の研究者たちが杉山の観点をオウムのように繰り返すのは，いっそう大きな問題である」と評する〔李康根2006，p.154〕など，批判的にみる研究者もいる．

7　「都城左右行廊成，自闕門至貞善坊洞口，行廊四百七十二間，進善門之南，建樓門五間，名曰敦化，議政府請，昌徳宮門外行廊分給各司爲朝房，又啓，（中略）從之」（『太宗実録』巻23，12年５月乙巳〔22日〕条）．〔杉山1984，p.113〕．

8　「命じて百官の朝房に会するを除かしむ．上，太祖の薨ずるより衰絰を以て視朝せず．然れども六衙に遇えば則ち百官，朝房に会す．是に至りて之を除くは，冱寒を以てなり」（『太宗実録』巻16，８年11月庚申〔16日〕条）．また『世宗実録』巻132，五礼，嘉礼儀式，迎詔書儀・迎勅書儀のほか，拝表儀には「宗親及び文武百官，倶に朝房に集まり各おの朝服を具う」とあり，朝房は儀礼直前の待機の場として利用された．

9　「命營議政府朝房于進善門外」（『太宗実録』巻21，11年９月乙巳〔15日〕条）．

10　「命修景福宮，上曰，景福宮，太祖創業之初所建也，若朝廷使臣來，必迎命于此，比來有司不用心修葺，自今宜以時修治」（『太宗実録』巻21，11年５月丁卯〔７日〕条）．後日，太宗は司諫院に「若朝廷使命之來及聖節朝賀之事，則必於此宮，故以時修葺，毋令傾圮耳」と語っている（同書巻22，11年10月壬辰〔４日〕条）．太宗代の昌徳宮造営事業と景福宮修繕事業は〔杉山1984，pp.99-102，pp.105-107〕，参照．

ｃ内史奉御善財奉勅書至，上率世子・百官，出迎于慕華樓，結山棚，備儺禮，導至昌徳宮，受勅書・賞賜，勅曰，（後略）（同書巻34，17年12月庚戌〔29日〕条）

太宗が景福宮を明使迎接の場として利用すると意思表示したのは，太宗11年の史料ａにみる前例を念頭に置いていたからであろう[11]．たしかに太宗は文武百官を率いて明使を慕華楼（明使の迎賓館）まで出迎えたのち，景福宮に迎え入れている．しかし，太宗17年の史料 bc では史料ａと同様，太宗は慕華楼まで出迎えているが，その後に明使を迎え入れて勅書を授かったのは景福宮ではなく，昌徳宮である．

また，太宗代における聖節の儀礼は実録記事に以下の４件が確認できる．

ｄ聖節日，使臣詣闕行賀禮，上以冕服率群臣，行賀禮畢，與使臣設宴，居任（＝通政司左通政趙居任）獨以病還館，（『太宗実録』巻５，３年４月癸亥〔17日〕条）

ｅ欽差官陳敬・李賓至昌徳宮，先行聖節賀禮，上冕服率群臣，行賀禮，仍宴敬等於廣延樓，（同書巻13，７年４月辛丑〔17日〕条）

ｆ百官以時服，行聖節賀禮，以上在衰絰也，（同書巻17，９年４月己丑〔17日〕条）

ｇ命世子率百官賀聖節于時坐宮，上以衰絰不出，（同書巻19，10年４月癸丑〔17日〕条）

史料ｄに「上，冕服を以て群臣を率い，賀禮を行う」とあるのをはじめ，これらの史料に「聖節の賀禮」とあるのは朝鮮国王が紫禁城に住まう大明皇帝の聖節を祝う王朝国家儀礼であって，のちに「望闕礼」として礼典・法典に整備されることになる[12]．史料ｄは開城還都期に誥命・印章・勅書を賜って太宗を「朝鮮国王」として承認された際の記録であり，残る史料 efg の３件が漢城において実施された聖節の儀礼の様子を伝える．史料ｇにみえる時坐宮とは昌徳宮の別称であるから，太宗７年と同10年（史料 eg）には昌徳宮を舞台に対明遥拝儀礼が実施されたと考えてよい．おそらく太宗９年（史料ｆ）に文武百官が代行した聖節の儀礼も昌徳宮にて執り行われたことであろう．ところが，太宗が景福宮を対明外交儀礼の場として利用すると意思表示した太宗11年以後，『太宗実録』には聖節の儀礼に関する記録を欠く．実際のところ太宗の意思表示が実行に移されたものかどうかは史料上，判然としないのである．ただ，明使接待儀礼に関してはその後，太宗18年正朝に「上，百官を率いて帝正を遥賀す」との記録につづけて，

ｈ宴使臣于勤政殿，上如太平館，請迎使臣於景福宮，贈以鞍馬，仍設宴於勤政殿，命軍器監設放火之具於勤政門外庭，至暮宴罷，與使臣御勤政門觀放火，火焰横空，聲振宮庭，使臣及頭目等甚奇之，讃服無已，抵夜，使臣還太平館，（『太宗実録』巻35，18年正月壬子朔条）

とみえる．この史料ｈの使臣はさきの史料ｃにみた明使陸善財である．太宗は正朝の対明遥拝儀礼を終えると，太平館（明使の宿泊施設）に滞在中の明使のために，景福宮に宴席を設けている．日が暮れると，勤政門外に準備されていた花火を太宗と明使はとともに観覧した．それゆえ，昌徳宮は明使より正式に勅書を受け取る場として，景福宮はその後の各種接待儀礼の場として利用されていたと推測される．太宗12年に景福宮の西隅に壮大な

11　史料ａの明使黄儼は朝鮮の処女ならびに写経の紙地１万張の進献を求めて来朝した．史料ｂの明使黄儼もやはり処女進献が目的であり，史料ｃの明使陸善財はその処女進献に対する謝辞と賞賜を携えて来朝した．

12　太宗代当時は「向闕礼」と記録されることもあり，のち世宗即位年（1418）11月冬至の実録記事に「望闕礼」と表現されることになる〔桑野2004，pp.53-56，pp.62-63〕．

慶会楼を建設したのも，明使の接待儀礼を意識してのことである〔杉山1984，p.106〕.

つまり，太宗代後半期になると，王権を表象する「場」が太祖代に建設された景福宮から東側の昌徳宮へと移動したことになる．漢城における中心軸の移動ということもできよう．近世朝鮮の漢城という都城は古代中国の都城建設のように中心軸はさほど確固たるものではなく，王朝開創期のある時期においては移動することもあったのである．本来，景福宮の離宮として建設された昌徳宮が正宮のごとく利用されることもあり，文禄・慶長の役までこのふたつの王宮が都城内の東西に併存したところは，朝鮮の特色というべきかも知れない.

礼制に関して張志連氏は，太宗９年の貞陵（太祖継妃陵）遷葬のほか，太宗13年より同14年にかけて中祀・小祀を中心に祀典の整備が進み，漢城周辺の祭壇もこの頃までには大部分が改築・新築されたところにも注目する[13]．こうして太宗代に漢城は市廛行廊の建設により経済的中心地となると同時に，王朝国家の公式的祭壇を整備することによって聖所としての位相をも備えるようになったのである.

４，礼制からみた漢城の建設原理

礼制が朝鮮の都城建設におよぼした影響について考察した論攷に，任敏赫「朝鮮初期礼治社会を志向した首都漢城建設計画」（2006）がある．とくに注目すべきは「先祠堂建設論」である.

朝鮮王朝開国直後，太祖李成桂は即位に際して大小の臣僚以下，閑良・耆老・軍民を対象に新王朝の国政方針を示す教書を公表した．全17条で構成されたこの教書の内容は宗廟・社稷制をはじめ，高麗王氏後孫の処遇問題や文武科挙の整備，冠婚葬祭制，守令制，忠臣孝子の表彰など多岐にわたる．この即位教書の作成者は「王朝の設計者」とも評される鄭道伝であるが，全17条のうち筆頭に掲げたのが宗廟・社稷制であった[14]．鄭道伝はのち太祖３年７月に新都建設のための風水地理書籍を調査研究するために設置された陰陽刪定都監に参与して以来，漢城の都市設計の主役となり，12月には宗廟と宮闕の起工式に参席し，国王に代わって皇天后土の神々に祭祀を捧げた儒者官僚である[15]．中国古代の「左祖右社」という礼制建築が都城計画の基本要素であったことはいうまでもないが，朝鮮王朝は開国にあたり，あらたな儒教的社会秩序へと改編すべく国家儀礼の制度化から出発したことが読み取れよう．一定の儀礼を挙行することにより，これを媒介に人為的な君臣関係の上下秩序を再生産あるいは維持することが可能となる．そして都城建設の際に立脚した礼制の

13　この点はかつて筆者も注目した．たとえば〔桑野2003〕〔桑野2006〕，参照．なお，太祖継妃神徳王后康氏は当初，太祖６年に都城内の西部聚賢坊（いまのソウル市中区貞洞）に葬られていたが，遷葬後，旧貞陵の石像は清渓川広通橋の補修用石材として使用された.

14「敎中外大小臣僚・閑良・耆老・軍民，王若曰，（中略）一，天子七廟，諸侯五廟，左廟右社，古之制也，其在前朝，昭穆之序・堂寢之制，不合於經，又在城外，社稷雖在於右，其制有戾於古，仰禮曹詳究擬議，以爲定制，一，（中略）敎書，鄭道傳所製，（後略）」（『太祖実録』巻１，元年７月丁未〔28日〕条）.

15　新宮闕である景福宮の勤政殿・思政殿・交泰殿をはじめとする殿閣名，闕門名はもちろん，都城の四大門（崇礼門・興仁之門・敦義門・炤智門〔のち粛靖門〕）と四小門（昭義門・彰義門・恵化門・光熙門），鐘路の鐘閣（普信閣）の名称を名付けたのも鄭道伝であり，ここに漢城は「仁義礼智信」の五徳を備えた都市を象徴するようになった〔韓永愚1999，pp.61-66，pp.71-74〕.

原理のひとつが「先祠堂建設論」であるという．宮闕より宗廟と社稷の築造計画を優先したのは，『礼記』曲礼に「君子，将に宮室を営まんとすれば，宗廟を先と為し，厩庫を次と為し，居室を後と為す」とみえる[16]ごとく，当時の儒者官僚がこの「先祠堂建設論」にしたがったからであるという．とすれば，李成桂が漢城遷都に際して宗廟の選定を最優先課題としたのも納得がいく．

というのも，漢城の建設について以下のような特色を提示した論者もいる．

> 一般的に計画都市の建設が，位置決定→都市設計→都市建設→入居（遷都）という順序で行われるのに対して，漢城の場合，位置決定→入居（遷都）→都市設計→都市建設という順序になり，遷都を非常に急いだことが大きな特色として指摘できる．（中略）次に注目されるのは，都市設計・建設と言っても，王宮・宗廟・社稷・官庁・城壁がその主たる対象であり，道路網をはじめとする内部空間の緻密な構成については，記録上の限界を考慮する必要があるものの，ほとんどその形跡が見あたらないことである．〔吉田1992，pp.96-97〕

一般的な計画都市の建設順序の当否はともかく，任敏赫氏が提起した「先祠堂建設論」に照らせば，李成桂は「あえて拙速と思われるほど遷都を急いだ」〔吉田1992，p.96〕わけではなかろう．たしかに李成桂が「新都」漢城に入って旧漢陽府の客舎（客館）を離宮としたのは太祖３年（1394）10月28日のことである[17]が，それ以前に権仲和・鄭道伝らの政府高官は９月上旬に漢城を視察し，廟社・宮闕・朝市・道路の敷地を選定し，図面をもって献じていた[18]．漢城の都城プランは事前に政府高官によって作成されていたのである．そして李成桂が漢城に入った４日後，11月２日の実録記事に「上，都評議使司（＝朝鮮初の最高議決機関）及び書雲観（＝地官・天文官に相当）の員吏を率い，宗廟・社稷を営むの地を相す」とある[19]のは，このとき朝鮮政府がはじめて宗廟・社稷の地を選定したのではなく，李成桂が政府高官の青写真をもとに現地を視察したと判断すべきであろう．「相地」とは，土地の善し悪しを占いみることであって，漢城内の複数の候補地から選び取ったわけではない．その翌日，臨時官庁として工作局が設置され，都評議使司の建議を承けて李成桂は都城の建設を正式に決定する[20]．それゆえ，漢城の都城建設は位置決定→入居（遷都）→都市設計→都市建設ではなく，位置決定→都市設計→入居（遷都）→都市建設という順序になろう．漢城遷都後，実際の都市計画には微調整も生じたであろうが，そもそも何ら都城設計もないまま国王が開城から漢城に遷都したとは考えられない．漢城遷都は

---

16 「君子將營宮室，宗廟爲先，厩庫爲次，居室爲後」（『礼記』巻２，曲礼下）．

17 「至新都，以舊漢陽府客舍爲離宮」（『太祖実録』巻６，３年10月甲午〔28日〕条）．漢陽は高麗時代，983年（成宗２）に中央から地方官が派遣される主牧の楊州牧となり，1067年（文宗21）に楊州牧は南京に昇格し，翌年には宮闕を建設して国王巡駐京である三京（開京・西京・南京）のひとつとなった．しかし，のち事元期（元干渉期ともいう）の1308年（忠宣王元）に西京が平壌府に，東京が鷄林府に改編され，南京も漢陽府に格下げとなって三京制は廃止された．以上，南京の沿革は〔李丙燾1980，pp.146-147，p.304〕〔金甲童2002，pp.87-90〕〔崔恵淑2004，pp.10-13〕のほか〔李益柱2005，pp.70-72〕，参照．

18 「遣判門下府事權仲和・判三司事鄭道傳・青城伯沈德符・參贊門下府事金湊・左僕射南誾・中樞院學士李稷等如漢陽，定廟社・宮闕・朝市・道路之基，（中略）皆作圖以獻」（『太祖実録』巻６，３年９月丙午〔９日〕条）．

19 「上率都評議使司及書雲觀員吏，相營宗廟・社稷之地」（『太祖実録』巻６，３年11月戊戌〔２日〕条）．

20 『太祖実録』巻６，３年11月己亥（３日）条．

「拙速」であったわけではなく，礼制に基づいた都城計画により遂行されたとみるべきであろう[21].

また，漢城建設に大きく関与した権近についても再考すべきであろう．政権中枢部にあった権近は，高麗最末期の1389年（昌王元）６月に洪武帝に親朝を請う高麗使節として明の南京に派遣されたことがある．朝中間の建築交渉の可能性を探った李康根氏は権近が残した南京紀行「奉使録」に注目し，奉天殿での皇帝朝見，文華殿での拝謁，宿所である会同館での宴席参加が「北京での活動のすべてであった程度で，見聞の範囲が狭かった」と，否定的な結論を下す〔李康根2006，p.156〕．しかし，権近が南京では少なくとも奉天殿と文華殿，そして会同館の周辺を実見したことは疑いない．そのうえ新宮学氏が指摘したように，権近は南京へ赴く途中，北平（北京）では７月15日に「入北平城，前元旧都也」との記録につづけて，「翼翼たる都城四方を鎮す，百年財力も亦た雄強たり」，また「都城景勝壮ん，市巷物華繁し」云々と詩を詠んでいる〔新宮2004，pp.87-89〕[22]．朝鮮使節の外出制約はあった[23]にせよ，たしかに権近は南京と北京の壮大な都城を体験しており，こうした高麗末期の遣明使節による見聞も朝鮮の都城建設の際にはある程度活かされたのではないかと推測される．景福宮の宮名と諸殿閣名を命名したのは鄭道伝であるが，彼も新王朝開創直後の1392年10月に啓稟使兼謝恩使として南京に赴いた経験があり〔韓永愚1983，p.29〕〔同1999，p.57〕，「癸酉（＝1393年）正朝奉天殿口号」「謝恩日奉天殿口号」と題する２句の七言絶句を詠んでいる[24].

５，朝鮮世宗代の都城修築

さて，漢城を取り囲む城郭の築造は太祖代にひとまず完了し，のち世宗代に修築されることになる．周知のとおり，漢城の都城建築に関しては小田省吾氏による先駆的研究がある．太祖５年（1396）には197,470人余りが徴発され，工事期間は春節に49日間，秋節にやはり49日間であった．一方，世宗４年（1422）には322,460人が徴発され，工事期間は39日間，全体の城壁の約５割に相当する崩壊箇所が石城に改築された〔小田1931a，pp.40-42，pp.53-58〕．朝鮮時代最大のこの役事は農繁期を避けて農閑期に進められたが，死傷者・疾病者が続出したため，朝鮮政府も救療事業に力を注いだ〔小田1931b，pp.34-37〕．

朝鮮初期の都城築造に関する史料は実録記事に頼るほかないが，そうした史料的制約のなかで「築造謄録」の復元を試みたのが閔徳植「朝鮮初期都城の築造」（2007）である．

21　もっとも，明の永楽帝が北京遷都を実現するまで20年の歳月を要したことと比較すれば「拙速」ではあろう．しかし，北京ではいまだ官庁街さえ新築されないなど，首都空間は完全ではなかった〔新宮2004，pp.224-225〕〔同2005，p.386〕.

22　『陽村先生文集』（『影印標点 韓国文集叢刊』７，民族文化推進会，ソウル，1991年４月影印，所収．底本はソウル大学校奎章閣蔵本）巻６，奉使録．権近の使行は約４ヶ月間（６月４日～９月28日）におよび，往路は陸路と水路で，復路は一部海路を利用した〔厳慶欽2004，pp.188-192〕．なお，このとき明は高麗王の親朝を許可しなかった.

23　のち1547年（嘉靖26，明宗２）に明は朝鮮使節に対して圜丘壇と国子監の遊観を許可している．『萬暦大明会典』巻105，礼部63，朝貢１，東南夷上，朝鮮国条．また〔桑野2010，pp.85-87，p.142〕，参照.

24　『三峯集』（『影印標点 韓国文集叢刊』５，民族文化推進会，ソウル，1991年４月影印，所収．底本はソウル大学校奎章閣蔵本）巻２，七言絶句．鄭道伝の使行は10月25日から翌年３月20日までの約５ヶ月間におよんだ.

閔徳植氏は実録史料に基づいて新都漢城の建設事業を略述したのち，太祖代の築造事業に関しては都城築造都監，人力動員，食糧，監役官，城壁築造（開基・分地・体城〔母体となる城壁〕・修築），運搬，崩毀，物故，救療，犒饋，賞典の11分野に細分化し，世宗代の石築による修築事業の場合も都城築造都監，人力動員（動員・遅送），食糧，財用，監役官，城壁築造（材料・分地・体城），崩毀，物故，逃亡，救療，犒饋，巡審の12分野に細分化して当時の状況を復元した．この基礎的作業のうえで都監の組織，役夫の内容（対象・規模・食糧），役事の期間，監役官，築城の内容（規模・分地・材料・財用），工法，匠人，処罰（怠慢・崩毀・遅送・逃亡），犒饋と賞典，物故，救療の９分野にわたって太祖代と世宗代を総合的に比較・整理している．

謄録の復元を研究目的としただけに叙述内容は多岐にわたるが，閔徳植氏がもっとも重視したのは刻字城石の存在であろう．築造事業においては効果的な分割と監役がなにより重要であるが，太祖代には白岳（北岳山）の東側から「天」字で始め，駱山・木覓山（南山）・仁旺山を回って白岳の西側に戻り，「弔」字で終わるようにした．総周囲59,500尺（約18㎞）を600尺（約182m）ごとに千字文の１文字を付して97区域に分け，さらに各区域を６分割して各道の担当箇所を割り振った．たとえば，いまのタワーホテル（ソウル市中区奨忠洞）に近い南小門址[25]から南山頂上にかけて，慶尚道の担当表示として「崑字六百尺」「崗字六百尺」[26]など当時の刻字城石が確認されている．もちろん，こうした築造の分担方法は戦前の『京城府史』にその概要が提示されており〔京城府1934，pp.156-165〕，また刻字城石も小田省吾氏が1916年７月23日から８月28日にかけて122点（判読不明20点）を調査し，「崑字六百尺」「崗字六百尺」などの刻字城石についても数点，図版を提供するとともに各道受け持ち区域の配列に関しても考察を加えていた〔小田1931a，pp.42-43，pp.46-53，pp.58-68〕．しかし，閔徳植氏は2007年にソウル城郭の刻字城石をあらためて調査し，別稿にて太祖代19点と世宗代35点を含む全89点の刻字城石について解説をほどこすとともに全図版を提示している〔閔徳植2008a〕〔同2008b〕[27]．なかにはかつて小田省吾氏が判読できた刻字城石も，歳月の経過とともに摩滅がはなはだしくなり，判読が困難となったものもある．とはいえ，実録記事に加えて刻字城石という築城関連金石文をあらためて整理・検討したことは，今後の漢城城郭研究の一助となろう．

６，漢城と開京―今後の課題

すでにみたように，漢城建設にあたっては宗廟と社稷の設置が最優先された．古代中国の『周礼』考工記や『礼記』曲礼にのっとった理想的な都城建設であって，あらたに王朝を開創した王室がその正統性と神聖性を演出・主張するには必須の儀礼舞台であったに相

25　南小門は1457年（世祖３）頃に南山と光熙門（東大門と南大門のあいだの小門）のあいだに設置されたが，まもなく1469年（睿宗元）に閉鎖となり，植民地時代に撤去された〔京城府1934，p.172〕〔元永煥1990，pp.153-154〕．

26　「崗」字は千字文の48番目で，千字文には「玉出崑崗（玉は崑崗に出づ）」とある．南小門址付近は「太祖時城壁の好標本」とされる〔小田1931a，p.53〕．

27　ただ，軍事施設がある場合や個人住宅の塀に利用されている場合，刻字城石を調査できないのが実状であるという．また，閔徳植氏は高句麗平壌城と漢城の都城築造過程を比較検討している〔閔徳植2010〕．

違ない.

ところが，前朝の高麗王朝の場合はやや事情を異にした．高麗の都城開京の空間構造は朝鮮の漢城に多大な影響を与えたと理解されている[28]が，開京に宗廟が建設されたのは第6代高麗国王成宗代（981～997年）の989年（成宗8）であり，社稷の建設は991年（成宗10）である[29]．919年（太祖2）の開京遷都からすでに70年を経過している．もっとも，高麗時代に祭天儀礼である圜丘壇祭祀が実施されたのも同じく成宗代の983年（成宗2）であって[30]，当該期に儒教政治理念による王朝国家儀礼の整備が進んだことはつとに知られていた[31]．ただ，禹成勲氏はそれまでの宗廟・社稷の代替施設として都城内に建立された10か所におよぶ寺院（開京十寺）の存在に注目しており〔禹成勲2004，p.169〕〔同2007〕〔同2010，pp.242-245〕，その政治的・社会的背景の究明に期待される．開京の寺院はたんなる宗教施設ではなく，王宮・宗廟・官庁の存在と同等のレヴェルで理解すべき存在であろう．朱子性理学（儒教）を統治理念とした朝鮮の都城漢城とは異なり，高麗では仏教理念が開京の建設に重要な指針となったところにも禹成勲氏は注意を喚起しており[32]，今後の開京と漢城の比較研究においても示唆に富む．すでに，外国の使節と商人を取り込んで宮廷と皇城内の法王寺で行われた仲冬八関会，宮廷と高麗太祖の真影を奉安する皇城外の奉恩寺にて行われた上元燃灯会の存在に関しても注目されており[33]，仏教儀礼空間としての高麗の都城開京についても再検討すべき時期に来ている．

むろん，最近の韓国歴史学界では近世朝鮮における宮城空間，遷都論／廃都論，さらには開京の宮闕建設に関する注目すべき論攷もあらたに公表されているが，これらの研究動向整理は別の機会に譲りたい．

28　たとえば〔金東旭1999，pp.35-36〕によれば，宗廟と社稷壇の非対称的な配置，西北に片寄った宮闕，不規則な城壁と道路網など，漢城の都市構成は開京の立地条件と構造を踏襲したと指摘する．

29　「始營大廟」（『高麗史』巻3，世家3，成宗8年夏4月乙丑条），「始立社稷，教曰，（後略）」（同書巻3，世家3，成宗10年春閏2月癸酉条），「大廟成」（同書巻3，世家3，成宗11年12月条）．のち『高麗史』巻7，世家7，文宗6年2月辛巳条に「新築社稷壇於皇城内西」とあり，社稷壇は1052年（文宗6）に新築された．

30　「王祈穀于圓丘，配以太祖」（『高麗史』巻3，世家3，成宗2年春正月辛未条）．

31　たとえば〔李範稷1991，pp.71-76〕．最近では〔都賢喆2005，pp.85-90〕が五礼を中心とした国家儀礼の整備のほか，三省六部制の受容，宗廟・社稷制と行政体系である五部の導入など，高麗成宗代における『周礼』認識と運用について整理した．

32　〔禹成勲2004，p.168〕によれば，開京の寺院には国王が長期間滞在し，あるいは国家儀礼として宋皇帝の誕生祭（哲宗の天寧節），正朝の朝賀礼が行われるなど，王宮としての役割も果たしていたという．事元期に忠烈王（1274～1308年）が寺院にて実施した正朝の朝賀礼の予行演習（忠烈王25年12月），元帝成宗テムルのための正月望日の賀礼（同王27年正月丙辰）のほか，元帝の聖甲日（生年と同じ干支の日．本命日）を寿ぐ賀礼（同王27年正月乙丑）については筆者も注目したことがある〔桑野2004，pp.11-16〕．

33　たとえば〔二宮1958〕〔奥村1979〕〔同2007〕のほか，最近では国王が主催する宴会儀礼に注目した〔豊島2009〕があり，韓国では〔安智源2005〕が国王を頂点とする支配秩序を象徴的に具現した空間としてこれらの仏教儀礼に注目した．

【参考文献】　＊韓国語の書名などはすべて日本語に翻訳した.

金甲童「高麗時代の南京」（『ソウル学研究』18，ソウル市立大学校附設ソウル学研究所，ソウル，2002年３月）
金東旭『朝鮮時代建築の理解』（ソウル大学校出版部，ソウル，1999年11月）
金昌賢『高麗開京の構造とその理念』（新書苑，ソウル，2002年10月）
閔徳植「朝鮮初期都城の築造」（『郷土ソウル』第69号，ソウル特別市史編纂委員会，2007年２月）
同　「ソウル城郭の築城関聯金石文」（『郷土ソウル』第71号，2008年２月）ａ
同　「ソウル城郭の築城関聯金石文〔補〕」（『郷土ソウル』第72号，2008年10月）ｂ
同　「都城の築造過程に対する検討―高句麗平壌城（長安城）と漢陽都城の築造を中心に」（『郷土ソウル』第75号，2010年２月）
朴サンビン「最近のソウル地域朝鮮時代考古学の成果」（『都市歴史文化』第７号，ソウル歴史博物館，ソウル，2008年12月）
朴龍雲『高麗時代開京研究』（一志社，ソウル，1996年12月）
朴チュンボム「ソウル漢陽都城内部の朝鮮時代遺跡発掘調査の現況と成果―ソウル世宗路光化門広場内の六曹通りを中心に」（『高麗・朝鮮時代の住居と村落（第53回全国歴史学大会考古学部発表資料集)』韓国考古学会，ソウル，2010年５月29日）
徐聖鎬「開京の市場」（韓国歴史研究会編『高麗の皇都開京』創作と批評社，ソウル，2002年１月）
ソウル特別市史編纂委員会編『ソウル特別市史（古蹟篇)』（ソウル特別市，ソウル，1963年12月）
同　『ソウル建築史（ソウル歴史叢書２)』（ソウル特別市，ソウル，1999年２月）
安智源『高麗の国家仏教儀礼と文化―燃灯・八関会と帝釈道場を中心に』（ソウル大学校出版部，ソウル，2005年12月）
厳慶欽「鄭夢周と権近の使行詩に表現された国際関係」（『韓国中世史研究』16，ソウル，韓国中世史学会，2004年４月．のち曺圭益他編『燕行録研究叢書７（政治・経済・外交)』学古房，ソウル，2006年９月に再録）
元永煥『朝鮮時代漢城府研究』（江原大学校出版部，春川，1990年11月）
李康根「朝鮮前半期の建築と対明関係」（社団法人韓国美術史学会編『朝鮮前半期美術の対外交渉』藝耕，ソウル，2006年６月）
李ギボン『朝鮮の都市，権威と象徴の空間―韓国的伝統都市景観の原型探索』（セムン社，ソウル，2008年８月）
李丙燾『高麗時代の研究―特に図讖思想の発展を中心に』（亜細亜文化社，ソウル，1980年６月改訂版）
李相球「朝鮮の宮闕と出会う―宮闕の前と後」（『ソウル学研究』33，ソウル，2008年11月）
李愚鍾「中国とわが国の都城の計画原理および空間構造の比較に関する研究」（『ソウル学研究』５，ソウル，1995年６月）

李益柱「高麗時代南京研究の現況と課題」（『都市歴史文化』第３号，ソウル，2005年２月）
任敏赫「朝鮮初期礼治社会を志向した首都漢城建設計画」（『ソウル学研究』27，ソウル，2006年８月）
鄭杙根「すべての道は開京へ」（韓国歴史研究会編『高麗の皇都開京』創作と批評社，ソウル，2002年１月）
張志連「麗末鮮初遷都論議について」（『韓国史論』43集，ソウル大学校人文大学国史学科，ソウル，2000年６月）
同　「朝鮮時代都市社会史研究の現況と課題」（『明清史研究』第17輯，明清史学会，ソウル，2002年４月）
同　「太宗代後半の首都整備と意味」（鄭玉子他『朝鮮時代文化史（上）―文物の整備と王室文化』一志社，ソウル，2007年12月）
崔恵淑『高麗時代南京研究』（景仁文化社，ソウル，2004年９月）
都賢喆「麗末鮮初改革思想の展開と『周礼』」（延世大学校国学研究院編『韓国中世の政治思想と周礼』慧眼，ソウル，2005年12月）
韓永愚『改正版 鄭道伝思想の研究』（ソウル大学校出版部，ソウル，1983年８月）
同　『王朝の設計者 鄭道伝』（知識産業社，ソウル，1999年10月）　〈以上，韓国語〉

新宮学『北京遷都の研究―近世中国の首都移転』（汲古書院，2004年１月）
同　「近世中国における首都北京の成立」（鈴木博之他編『近世都市の成立（シリーズ都市・建築・歴史５）』東京大学出版会，2005年９月）
禹成勲「国家権力の都市支配装置としての開京寺院」（『日本建築学会計画系論文集』第584号，日本建築学会，2004年10月）
同　「高麗の首都，開京の都市商業施設に関する基礎的研究―『居肆』と『虚』の解釈を中心に」（『日本建築学会計画系論文集』第596号，2005年10月）ａ
同　「韓国の前近代都市研究史―高麗時代と朝鮮時代の都市史研究を中心に」（『年報都市史研究13（東アジア古代都市論）』山川出版社，2005年11月）ｂ
同　「開京の都市商業施設の建築形式と役割」（『日本建築学会計画系論文集』第598号，2005年12月）ｃ
同　「高麗太祖代の開京への遷都と都城空間化に関する研究」（『日本建築学会計画系論文集』第619号，2007年９月）
同　「開京－高麗建国期の都城化」（吉田伸之他編『伝統都市１（イデア）』東京大学出版会，2010年５月）
奥村周司「高麗における八関会的秩序と国際環境」（『朝鮮史研究会論文集』第16集，龍渓書舎，1979年３月）
同　「高麗における燃燈會と王権」（記念論集刊行会編『福井重雅先生古稀・退職記念論集　古代東アジアの社会と文化』汲古書院，2007年３月）
小田省吾「京城奠都の由来と其の城壁に就て」（『朝鮮』第197号，朝鮮総督府，京城，1931年10月）ａ
同　「京城奠都の由来と其の城壁に就て（下）」（『朝鮮』第198号，京城，1931年11月）

b
北村秀人「高麗時代の京市の基礎的考察―位置・形態を中心に」（『人文研究（大阪市立大学文学部紀要）』第42巻第４分冊，1990年12月）
桑野栄治「朝鮮時代の国家祭祀と儒教―王権の創造と演出」（『アジア遊学』50，勉誠出版，2003年４月）
同　『高麗末期から李朝初期における対明外交儀礼の基礎的研究』（2001～2003年度科学研究費補助金〔基盤研究（C）（2）〕研究成果報告書，2004年２月）
同　「朝鮮初期の官撰史料にみる王陵」（『都市と環境の歴史学』第３集，中央大学文学部東洋史学研究室，2006年３月．のち2011年３月増補版に再録）
同　『朝鮮前期の対明外交交渉に関する基礎的研究』（2007～2009年度科学研究費補助金〔基盤研究（C）〕研究成果報告書，2010年２月）
京城府編『京城府史』第１巻（京城府，京城，1934年３月．湘南堂書店，1982年６月復刻）
杉山信三『韓国の中世建築』（相模書房，1984年10月）
妹尾達彦「中国の都城とアジア世界」（鈴木博之他編『記念的建造物の成立（シリーズ都市・建築・歴史１）』東京大学出版会，2006年２月）
豊島悠果「高麗の宴会儀礼と宋の大宴」（宋代史研究会編『『宋代中国』の相対化（宋代史研究会研究報告第９集）』汲古書院，2009年７月）
二宮啓仁「高麗朝の上元燃燈會について」（『朝鮮学報』第12輯，朝鮮学会，1958年３月）
細野渉「高麗時代の開城―羅城城門の比定を中心とする復元案」（『朝鮮学報』第166輯，1998年１月）
吉田光男「漢城の都市空間―近世ソウル論序説」（『朝鮮史研究会論文集』第30集，緑蔭書房，1992年10月．のち同『近世ソウル都市社会研究―漢城の街と住民』草風館，2009年２月に再録）